

Patrice Fava (パトリス・ファーバー) 監督
「妙峰山廟会 四百年の歴史」 翻訳と解説

二ノ宮聡

はじめに：解説

映画のタイトルにある「妙峰山」は、北京市内から西におよそ 50km の郊外に位置する山である。妙峰山山頂には碧霞元君廟が鎮座し、毎年旧暦 4 月 1 日から 15 日の 2 週間、碧霞元君の聖誕を祝うため廟会が開催される。

もともと妙峰山廟会は明代にはじまったとされ、清代後期から民国時期にかけて「華北一帯の香主」と呼ばれるほど活況をみせ最盛期を迎える。その後、度重なる戦乱、さらに文化大革命により廟会活動は停止を余儀なくされる。そして、1990 年に廟会が復興すると、かつての賑わいを知る人々が中心となり、さらに地域の伝統文化復興という名の下に現在に至るまで年を追うごとに活動は盛んとなり、かつての賑わいを取りもどしつつある。

本映画は、監督であるパトリス・ファーバー (Patrice Fava) 氏が、廟会の復興や現状ではなく、廟会に参加する信仰者集団である「花会 (香会)」の活動を調査し、インタビューを中心に記録している。花会には、廟会活動や参拝者に休憩場所や食事の提供など様々な奉仕活動をする「文会」、演舞や技芸で参詣者を楽しませる「武会」がある。かつて妙峰山廟会は、この花会 (香会) が目玉のひとつでもあり、ひとたび廟会が始まると、碧霞元君への参拝者と花会目当ての観光客で、北京市内の寺廟では線香の煙が絶えた言われるほどであった。ファーバー氏は、現在の妙峰山廟会に参加する花会の代表者 (会首) へのインタビューなどを通じ、彼らが廟会に参加する目的、花会を運営する意義などを詳細に調査されている。こうした面から見ても本映画は、単に廟会復興を記録しただけでなく、そこに参加する人々の様々な考えが映し出されており、大変興味深い内容となっている。また、廟会復興以降、現在の社会情勢に合わせて毎年のように変化を続ける廟会活動にあって、5 年後 10 年後にはどういった活動に変化しているか予想し難い面もある。そうした意義から見ても、今現在の活動を記録したという点で大変貴重な研究である。

そこで本稿では、パトリス・ファーバー氏の記録映画「妙峰山廟会 四百年の歴史」の日本語訳を試みた¹⁾。上に紹介したように、本映画は廟会の活動内容ではなく、廟会の目玉のひとつである花会にスポットを当て、インタビューを実施しつつ、途中で多くの廟会の様子を映した映像が挿入されている。そのため、可能な限り場面を区切り映像の内容が伝わるように整理したつもりであるが、やはり文字だけでは映画の内容を理解しにくい部分もあると思われる。

注 1…日本語字幕は 2021 年 12 月に二ノ宮聡 (北陸大学) が作成、土屋昌明・王瑄が協力。

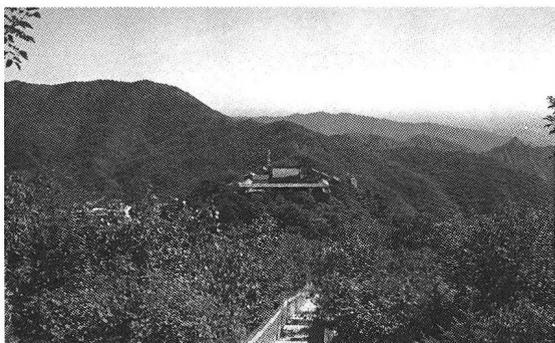


図 01：妙峰山玉皇廟から望む恵濟祠



図 02：廟会の出し物（早船会）



図 03：廟会のにぎわい（以上写真、2011年5月、二ノ宮撮影）

筆者自身の力不足であり申し訳ない。機会がある方はぜひ映像を御覧頂き、できれば直接廟会に足を運び、廟会の熱気や雰囲気を感じて頂きたい。

筆者自身は、2010年に初めて妙峰山碧霞元君廟を訪れ、2011年と12年には廟会の調査を実施している。この当時、妙峰山廟会は本格的復興からさほど時間が経っておらず、かつての廟会を再現することに力が注がれていたように感じる。しかし、その後、地域振興や観光資源としても廟会が注目を集めるようになり、地元政府など多くの公的機関が関わりを持つようになってくる。公的機関が関わると、廟会はさらに名が知られるようになるものの、多くの制

度が定められ、規制が増え、廟会が本来持っていた自由闊達さや特色が薄れる傾向にある。これは妙峰山に限らず、各地の著名廟会でも同様の現象がみられる。ファーバー氏の映像も筆者の調査とほぼ同時期に撮影されている。この映画は、単に廟会や花会復興を記録したに留まらず、かつての廟会をそのまま復興する事に力が注がれ、復興後の廟会が自由で最も活気を有していた時の記録でもある。復興後の廟会活動の変遷の1ページを切り取った貴重な映画であると言えるのではないだろうか。

最後に簡単にファーバー氏の経歴を簡単に紹介しておく。ファーバー氏は、フランス国立極東学院北京センター (École française d'Extrême-Orient Center de Pékin) の教授であり、30年以上にわたり北京に在住しながら、中国の地域社会で行われている宗教儀礼や宗教的行為を記録し、映像作品として数多くの成果を発表している²⁾。「妙峰山 四百年の歴史」もこうした氏の長年にわたる地道な研究調査の集大成の一つと言えよう。

以下は本映画の中国語字幕の日本語訳である。翻訳はできるだけ逐語訳を心がけた。だが、本映画はインタビューをメインに構成されているため、時には同じ内容の繰り返しや、前後で発話内容に齟齬が見られる。こうした部分に関しては、本来の内容を損なわないよう注意しつつ、意味が通じるように文章を整理した。この点についてご理解頂ければ幸いである。

同一インタビュー内で複数人の発話がある場合は、発話者が分かるよう便宜的に名前を付けた。各インタビューは、冒頭に「 」でインタビューーの名前や所属花会を示した。また、インタビューーなどが明示されている場合は、《 》で映像の状況が分かるようにした。文字によるキャプションの表示は〈 〉で示した。

「妙峰山廟会 四百年の歴史」字幕の日本語訳

〈中国の祭日 映像記録〉

〈妙峰山廟会 四百年の歴史 監督：パトリス・ファーバー〉

《冒頭ナレーション》

妙峰山は、北京市内から55kmの距離、主峰は標高1291mの山である。妙峰山伝統民俗廟会は明末に始まり、今日まで400年あまり続く華北地域最大規模の伝統民俗廟会である。1925年、北京大学国学研究所の顧頡剛、庄尚巖、孫伏園たちは、妙峰山の専門的調査を実施する。この調査は中国民俗学のフィールド調査の先駆けとなった。そのため、妙峰山は中国民俗文化研究発祥の地とも称される。

2008年、妙峰山は国家級非物質文化遺産に登録され、そこでの活動が保護

注2…三田村圭子「中国宗教儀礼における映像人類学」、土屋昌明編『映像の可能性を探る ドキュメンタリーからフィクションまで』、専修大学社会科学研究所社会科学叢書、2018年、153-188頁。

される。毎年の廟会期間には、全国各地から数万人にのぼる善男信女、さらに100以上の民間の香会が山頂の娘娘廟に参拝するために集る。

「王淑銀 93歳へのインタビュー」

焼香の線香はそれは多くてな、どれも束のまま香炉に放りこまれる。今年4月の廟会の線香は、翌年4月の廟会まで炉の底で燃え続け、ずっと煙がくすぶっておる。香炉も大きくてな、娘娘殿前の大香炉は、それはそれは大きくて深い。今年4月の廟会で奉じられた線香は、来年4月の廟会のために掃除せんといかん。なにせずっと燃え続けたままなのでな。

『Sydney Gamble (シドニー ギャンブル) 1927年の妙峰山廟会映像の挿入』³

3つの老道(旧参拝道):老北道は、趙公口から上がり、南口(村)を通る。東の参道は北安河からで、南は門頭溝から上がってくる。参拝客は色々な所から来ていて、天津や上海とか、各地の人が行き交っている。さらに金がある参拝客は駕籠や人夫を雇い、金がない人は、妙峰山にも線香売りはいるんだが、自分で一束の線香を担いで登っていく。金がある人は、爬山虎(駕籠)を雇い、4人に担がれて山を登っていく。北安河で駕籠を乗り継いでいく者もいるし、わしらの村から乗って妙峰山に行く者もおる。北安河から歩いて上っていく者もおる。

爬山虎に乗るのは金のある人で、金のない奴は一束の線香を担いで歩いて登る。わしらの村で宿泊する参拝者は、村人の家に泊ってもらう。村人は家の外に簡単な寝床を作ってそこで寝るから、外も人でいっぱいだ。これは村人にとって小遣いの稼ぎ時なんだよ。香会はたくさんあった。獅子会、小車会、鍋子会、小鼓会、腰鼓会、幡を使う会とか色々な会があった。

(求子の)人形を奉納して、本当に男の子や女の子が生まれたら、次の年にお礼の焼香に行く。男の子の人形を奉納すると、本当に男の子を授かり、女の子の人形を奉納すれば、娘が欲しいということで、後で本当に女の子に恵まれるのさ

『映像の状況説明の字幕』

開山
上表

『花会の焼香の様子』

啓白 京西蓮花 金頂妙峰山 靈感宮に御座します碧霞元君娘娘に申し上げます。全意向善 清茶聖会、徳清鮮花聖会の全ての会員が拝礼いたします。碧霞

注3…シドニー・ギャンブルの写真等は、アメリカ・デューク大学図書館で東アジアコレクションとしてアーカイブが公開されている。

デューク大学図書館 (<https://repository.duke.edu/>)、紹介記事「図書館に関する情報ポータル」 (<https://current.ndl.go.jp/node/8280>)。いずれも2021年1月28日確認

元君娘娘の聖なるご威光は我々をあまねく照らし、我らの生活では風や雨を整え、国を泰んじ、民を安んじてくださります。

会首・倪振山および陳徳清。丁亥年四月初一

『花会の焼香の様子』

敬虔であれ！ 敬虔であれ！

これは焚香表文さ（線香を焚いて文章を上奏する）。

『映像の状況説明の字幕』

還願（願解き）

「同心合縁 五虎打路会 会首 趙宝琪」

廟に参拝に来た方々、祭壇を守る文会武会の方々、京城内外の三山五頂、各香道から参拝に来られた世話役の皆様、西直門外 同心合縁 五虎打路会が参拝に来ました！ 敬虔であれ！

「会首 倪金堂」

この花会は、全意向善結縁茶会・揮塵老会・饅頭老会といえます。会の設立には父の倪振山が関わっていて、80年代初めに設立に動き出しました。会の目的は、金頂妙峰山に参拝する香客が徳を積むことを助け、娘娘様の殿宇をお守りすることです。毎年準備するこれらの物は、主な物として茶葉・白糖・サンザシがあります。会のメンバーはとても多く、会の善行活動は、家族や親戚、友人など皆が助けてくれ、出資もしてくれます。あらゆる費用はこうした人達の個人的出資で、行政とか社会団体の公的資金援助は一切受けていません。完全に我々の個人的な家族的な会なのです。毎年3月30日の夜から翌日深夜1時頃にかけて名簿を捧げ進香するのです。これは「上表」といい、会のメンバーや出資者、協力者の名前が書かれた名簿を碧霞元君の前で燃やして奉納します。主に会員や出資者、援助者といった人達が「我々は娘娘様のもとに到着しました」と娘娘様にお知らせするためです。

『花会同士の挨拶の様子』

敬虔であれ、敬虔であれ！ もう1度、敬虔であれ！ 最後にもう1回、敬虔であれ！

「同楽義善 五虎少林 前引 郭春傑」

劉家村の我々の小さな花会は、西鉄営村 徳清善縁 鮮花聖会にお会いしたので世話役様に三拝いたします。二拝、三拝。敬虔でありますように、どうぞ敬

虔であられよ！

「前引 郭春傑」

喜神とは唐王朝の非常に有名な皇帝——唐の玄宗・李隆基のことさ。なぜ玄宗が梨園界や戯劇界の開祖とされるのかって。それは、玄宗が生涯で最も愛したのが歌や踊りだからさ。戯曲では、宮中の大規模な活動はどれも彼自身が責任者となった。だから梨園界、つまり今の京劇界は中国の文化的精華だから、玄宗を開祖として祀るんだ。

清末から民国初期、つまり光緒年間には西太后までもが喜神を崇めていた。現代でも京劇界の著名な大家や上演の芸術家など誰もが妙峰山の喜神に参拝していて、こうした人達の喜捨によって、この喜神殿は建てられたんだ。

毎年4月1日から15日の廟会期間になると開祖様にお参りに来るのさ。例えば京劇で有名な4人の須生役——馬（馬雲良）、譚（譚富英）、楊宝森、徐曉波、さらに梅蘭芳、尚小雲、程硯秋などの名優たちもこぞって喜神様に参拝した。

どの業種にもそれぞれ固有の職業神がいて、その業種が順風満帆でより高いレベルへと発展し、天下に知られ、次の世代に伝承されるよう見守っている。だから昔から、祖師爺賞飯喫（天賦の才）という言葉もあるのさ。

「会首 韓碩」

この蓄えられた2本の口髭。顎髭は関係ないんだが、髭の有る無しで違うんだ。口ひげがある開祖像は昆曲の開祖なんだよ。昆曲を歌う全ての人は、開祖・李隆基に拝する時、必ず口髭がある像を祀るんだ。京劇では、北京に徽班が伝わった後も、どこの芝居小屋や舞台の裏手でも祀っている玄宗像に髭はなかった。これは違うものなんだよ。だから妙峰山で再建されたこの喜神像は昆曲で祀られる開祖様なんだ。

現在では多くの役者、さらにテレビの俳優までが李隆基（唐・明皇）を開祖として祀る。

だけど今の北京では、どの大劇場でも喜神を祀らなくなっちゃった。昔の芝居小屋は裏手で毎日の出演前に喜神様に線香をあげていて、どこの芝居小屋でも裏手には神棚があって、開祖・唐の明皇を祀っていた。今の劇場ではどこも見られなくなったが、妙峰山だけは喜神殿を再建したから、梨園の役者が崇める開祖様がいるのさ。

『花会同士の挨拶の様子』

敬虔であれ！ 敬虔であれ！

「群賢結善 茶葉聖会 会首 韓碩」

北京にある十数個の花会はどれも俺たちの賀会（会の結成と他の花会からの承認）に参加してくれたし、北京の有名な世話役達もが俺たちの祝賀会開催を手伝ってくれた。例えば俺たち群賢結善 茶葉聖会の3人の前引——黄栄貴、趙宝琪、郭春傑だよ。俺と妻はこの茶葉聖会の香首（代表）をやっている。

なぜ神農、つまり炎帝を崇めるのかって。神農は様々な草をみずから試す中で72もの毒にあたったが、茶葉で解毒した。この時に茶葉の有用性が発見されたって伝承がある。だから神農は、人間に茶葉をもたらした祖師であり、茶葉会の始祖として神農氏と呼び、祀るんだ。例えば清茶老会や清茶会では陸羽や観音も祀る。だけど俺たちの茶葉会で祀るのは神農氏なんだ。だからこそ、この群賢結善会は2014年に北京の十数ある文武各会が承認してくれた。かつて民国時期には北京で有名な前引・景米が会首をつとめる秉心如意 茶葉聖会があったが、のちに絶えてなくなった。俺たちが2014年に新たに会を結成して、承認を受け、娘娘様に上奏して道具を準備して、毎年の妙峰山廟会に娘娘様の殿宇をお守りしつつ茶葉を奉納するのさ。これは会を祝うための赤布で、会員の名前が書いてある。

「同心向善 饅頭聖会 会首 梅兄弟」

この饅頭会は15年前に友達で紹介してくれたのがきっかけで、妙峰山で娘娘様への進香を手伝うようになりました。もう15年くらい続けて参加しています。最初の頃、饅頭の量は数千斤と少なかったが、今では年間2万5千kgくらいです。毎年旧暦4月1日から15日まで毎日参加しますが、日によって配布量は違います。例えば平日は1000kgくらいですが、土・日は2000kgになります。

饅頭は街中では500gで2.5元、しかし我々のは街中より0.1、0.2元高い。専用の工場に注文して品質も最高です。饅頭には赤字で「福」とあり、普通の人はそんな饅頭を見ることもないでしょう。妙峰山に来ないとこの饅頭は食べられないのです。

『福茶会が参拝者にお茶を配っている様子』

どうぞ飲んでたくさん福を修めて。敬虔であれ、みなさん敬虔であれ！福を家に持ち帰りましょう、このお茶を飲んで福を持ち帰りましょう！どうぞ飲んで、敬虔であれ、敬虔であれ！

『中嶋村 善縁弾塵 修道老会の焼香』

中嶋村 善縁弾塵 修道老会が妙峰山管理所と世話役の皆様にご挨拶申し上げます、娘娘様に進香いたします！

『高里掌村 竹馬聖会の焼香』

殿宇を守る文武各会、三山 五頂 四郷 八鎮、北京城内外の世話役の皆様にご挨拶いたし、高里掌村 竹馬聖会が娘娘様方に焼香いたします！

「聚義同善 文武聖会および八馬芸術団の演舞」

左安門外 石榴庄 双廟村 聚義同善 文武聖会および北京市豊台区 石榴庄 双廟 八馬芸術団が金頂妙峰山に参拝に参りました。

「同心合縁 五虎打路 香首 趙宝琪」*4

武会は全部で十三堂ある。伝統として開路会が先鋒を務め、すぐ後に五虎会が続く。その後には侠客木（高蹠）会と中幡会が威風堂々と並ぶ。獅子会は廟の門の左右に控え双石会は門の敷居を、石鎖会は戸当り、槓子会はカンヌキを意味する。花壇会は美酒を捧げ、吵子会の音は途切れることがない。槓箱会が供物を奉納し、天平（秤）会は公平を見守り、太鼓会は五穀豊穡を願い太鼓を鳴らす。これで十三の武会が揃ったのさ。

この中で俺は五虎棍をやっている。五虎棍にも種類があって、世家棍、七角棍の少林棍、八角棍の少林棍、それに水滸棍などだ。こうした棍は水滸伝の“孫二娘 店を開く”、“燕青 武を競う”などの物語に倣っていて、「十字坡」なんてのもある。俺たちの五虎棍は宋の明德元年以前の趙匡胤が天下を取る話だ。ある日、趙匡胤は董家橋にさしかかると、董家の五虎が行く手を阻み難癖をつけ通行料を要求する。だが趙匡胤は金を払わず喧嘩がはじまる。実際には趙匡胤ではなく、たまたま通りかかった油売りの天秤を担いだ鄭子明が5対1では卑怯だと、天秤棒を手に趙匡胤の助けに入り董家五虎をのしちまったのさ。

後に明德元年に趙匡胤が黄袍に身を包み皇帝になると、董家五虎も臣下として仕える。そこには柴王（柴米）や鄭子明もいて一緒に趙匡胤の天下を支える。これが世家棍なんだ。

もともと世家棍は翰林院で作られた皇室の会だったが、次第に民間に伝わっていった。だから俺たちの同心合縁五虎打路は翰林院の伝統を受け継いでいる。俺の先輩に李長福という村の長老がいて、俺にも沢山の物を譲ってくれた。この会は彼が広めたんだ。彼のこの棍こそが翰林院の伝統を受け継いでいる。彼の言う合義同善 五虎打路、つまり俺たちみたいな打路会は北京の西北一帯にしかない。西直門から徳勝門、徳勝門から西四、西四から阜成門へと。そしてまた西直門に戻る。これら全部で世家棍なのさ。まるで孫悟空の七十二変化のような五虎棍なのさ。

注 4…これ以降、趙宝琪氏による武会の紹介が中心となる。紹介の途中で各武会の演舞の様子などの映像が挿入されている。以下、趙氏の解説部分は「趙」とした。

『南安河善縁老会 武松打店 五虎会の焼香』

金頂妙峰山、宝炉で金丹を練り、靈感宮前の線香は一年の四季の平安を保ち

ます。廟宇に参拝に来た方々、神殿をお守りする方々、神殿を守る文武各会、北京市内外、三山五頂、四郷八鎮、四つの香道、進香や茶棚の文武各会の世話役など全ての方々に対し、南安河善縁老会 武松打店 五虎会が拝礼します。敬虔であれ！

『五虎会と他の花会の挨拶』

一拝、二拝、三拝

『五虎会会首の解説』

主な登場人物は武松、孫二娘 張青 毛毛郎（燕順）、4人の兵卒の計8人だ。この会は光緒二年に成立して、水滸伝の第三十四回をモチーフにしている。つまり武松打店さ。母夜叉が人肉饅頭を売る店で武松と張青が出会うという故事だ。この会は北京で唯一、他は全部無くなっちゃったよ。

「趙」

これは開路会だ。開路は必ず五鬼を連れるべきなんだが、現在では五鬼を連れる開路会は少なくなった。なぜ五鬼が必要なのか？五鬼は神の道を祓い清めるのさ。現在でも正統な開路会は開路鬼という五鬼を連れている。しかし正確には皇室にこの会はない。それはなぜか。彼らが祀るのは鬼であって、皇室で鬼を祀ることはないからね。

『開路聖会の焼香』

金鼎の聖なる輿は中央に鎮座し、黒虎の玄壇神が背後に控え、清音童子は謹み輿を守り、四値功曹は大銅を鳴らす。廟宇にお参りの方々、殿宇をお守りする方々、三山五頂 四郷八鎮 四つの香道、御園の文武各会の世話役の皆様、全ての皆様、人人合縁 開路聖会が進香に参りました。二拝、三拝

「趙」

これは中幡さ。本来、妙峰山廟会に参加する中幡は五色の神幡が正式だ。五色神幡の五色は、赤、黄、青、白、黒で、この5本の旗が必要なんだが、今はまだ揃っていない。しかし技の練習や演舞の技術は昔よりずっと良くなっている。

『中幡聖会の焼香』

神殿をお守りする皆様、三山五頂 四郷八鎮の香客、参拝に来られた皆様、社長さん、若旦那、軍隊の将軍様、下士官様、錢糧管理のお役人様、全ての皆様、中幡聖会が娘娘様に進香に参りました。敬虔であらせよ。

『中幡の演舞の様子』

霸王拳鼎（技の名前）、霸王拳鼎（技の名前）。（技の説明）右に山を翻す、左右に山を翻す、額に乗せる、蘇秦 剣を背負う。

ご覧あれ、旗はどこに行くのか、視界には全く入ってないぞ。これは「反挑金背」といって3段階の高さに腕を上げるのを3回繰り返します。それ！もう1回。どうぞご喝采を！（観客）いいぞ！

ご声援あってこそ全力で演舞ができるのです。

「趙」

これは高蹠（竹馬踊り）。高蹠は秧歌（田植え歌）のことさ。だが秧歌も今ではどんどん少なくなっている。

『秧歌聖会の演舞』

左安門外 老君堂村 公議助善 秧歌聖会。お集まりの世話役の皆様に三礼いたします。

『秧歌聖会会首の解説』

これは『白蛇伝』の一幕を演舞にしている、北京の花会には天干地支の十二の精霊が参加すると村の老人達から教わった。だから現在でも農業大学が俺にインタビューに来たりする。高蹠会が白蛇伝に由来するのは西湖に遊ぶ歌が伝えられるのが証拠だと答えた。

これは「京香会」といって清朝になってできた。漁夫や木樵の髪型、文官や武官の扇、薬膏売りや漁婦、頭陀は法海禅師だし、兄ちゃんは許仙と白蛇の子供だ。俺たちの歌の中で、この子は塔に向かい拝礼しているのさ。

「趙」

十三檔会では、地秧歌は高蹠と同じとされる。高蹠に疲れて竹馬を下りたら地秧歌ってことだ。だが地秧歌専門の会もある。例えば紅寺太平同楽会なんかは地秧歌専門さ。

これは小車会だ。小車は十三檔会ではなく十六檔の一つなんだ。この会は清朝末年から民国初期に設立された。

これは早船会だ。早船会も清朝末年の成立で十六檔に属する。清代の十八村には早船会があって「前泥洼（地区）の棍、後泥洼（地区）の旗、孟村の早船」（地区が違えば花会も違う）なんて諺もある。

これは花壇会だ。壇子会は今では少なくなった

天平（天秤）会。本物の天平会は今は無くなった。天平会は3つの歌を歌

えないといけない。現在の天平会で歌うのが必須とされるのは墻子（カベ）、腿子（足）、鍋子（かすがい）、つまり『十里亭』『銅大缸』『老媽上京』の3つ。しかし、今この3つを歌える会はない。

太獅会。なぜ北京には太獅会と少獅会があるのか。太獅はどこに行くにも掌儀司と共にある。掌儀司は宮廷の役所の一つで、彼らが内八檔を差配するから宮中で上演ができるんだ。少獅は後からできたんだが、今は絶えて継ぐ者はいない。

『太獅会の演舞』

一拝、二拝、三拝

「趙」

石鎖会は断絶して数十年経った。今新しく一つ設立された。彼らは技を練習できるのが嬉しいんだ。技術は昔に及ばないが彼が再結成してくれたんだ。

これは少林会だ。少林棍と五虎棍が奉じる開祖は違う。五虎棍が奉じるのは戦いの聖仏であって、少林は関公なのさ。

双石頭会は現在一つの会があるが、昔の演目を再現するには力不足だ。双石頭会の主演目は堆山子（人が山なりに重なる）さ。堆山子は17人のもあれば13人のもある。ほかにも11人、9人、7人なんてのもあって、最少は5人で演武する。堆山（山を積み重ねる）とはバーベルのように両端に石を付けた棒の上に人が乗る。さらに石棒を置き、また人が乗る。

この絵は5人の堆山子だ。現在この技術は断絶し、できるのは簡単な小手先の技ばかりさ。

この脰鼓会（太鼓踊り）は本物の脰鼓だ。これは「井」字の会。なぜ井字の会というかって。それは、鑑子（摺り鉦）を連れているからさ。脰鼓会では鑑子を沈子（おもり）と呼び、井字会以外は連れていない。

これも脰鼓会だが花鉦（子どものシンバル）を連れている。この花鉦も井字会の沈子だ。この花鉦は現在の井字会にはおらず、井字会以外にいる。その大部分は門頭溝の会だ。

これは杠箱だ。杠箱会は途絶えてしまった。俺の家にも杠箱が二つ置いてある。演じるのは隋唐の故事で褚彪や黄天霸が登場する。賈継忠は小さな県の役人で、二人を捕まえて、皇帝に宝物や食料を献上する。これが演舞の内容さ。

「趙」

86年に俺と兄弟子が崇文文化館で杠箱会を復活させたのさ。会の復活には多くの金がかかり、集った人間も良くなかった。色々な人がいてまとまり無く、好き勝手やって結局失敗した。だが資料を残すことができた。

『北京テレビで放映された「杠箱会」再現番組』

「杠箱会」復興報告演出 北京電視台 2007年」

役人：お前はどんな濡れ衣を着せられ誰を訴えたいのだ？

上訴人：横暴極まりない強盗団がおりまして、いつも朝廷のお役人様になりすましております。お代官様どうぞ私の訴えを聞き入れ、奴らをお白洲に引っ立て我々の濡れ衣を晴らし、国法を正してくださいませ。

役人：強盗の頭領は誰だ？

上訴人：はい、江湖・四覇天の黄天覇と申します

役人：何だと？

上訴人：黄天覇でございます

役人：黄天覇だと!? 寝ぼけた事を言う奴だな。知っての通り黄天覇は今わしの部隊におるのだぞ。

「妙峰山廟会伝承者 王徳鳳」

妙峰山の廟会は明末に始まったとされ、今日まで400年あまりの歴史があります。廟会が最も盛んだったのは清代で、山頂の碑文は最盛期だった清代のものばかりです。廟会のことは弟弟子が話した通りです。

武会は十三堂（檔）あり、実際は娘娘廟内の十三堂にあとから早船、小車、踏車の三堂が加わって十六堂武会となりました。この武会十六堂のほかには文会もあります。現在の文会の正確な数はわかりません。文会は廟会の裏方で、奉仕活動をする会はどれも文会と呼びます。

妙峰山廟会は旧暦4月1日から15日までの半月間開催されるので、通常、文会は3月22日に妙峰山に登ります。清道会、修道会、浄道会、糊棚会、揮塵会、青菜会、献塩会、麵貢会、果貢会など廟内で奉仕活動する裏方の会はどれも文会と呼びます。ほかには捨粥、捨茶、捨饅頭、捨縁豆など参拝客に奉仕活動をするのも文会です。

妙峰山でお祀りするのは天仙聖母碧霞元君です。我々がいう三山とは妙峰山、丫髻山、天泰山の三山です。五頂とは北京の城壁を囲むように東西南北中に位置する5カ所の頂（廟）で、妙峰山は金頂に封じられました。それは康熙帝の勅封により金頂妙峰山と呼ばれるようになり、五頂の上に位置します。また香道と呼ばれる四本の主たる参拝道があります。南道は三家店を出発し妙峰山へ至ります。中道は大覚寺から、中北道は北安川から始まり、老北道は聶各荘が起点です。これが北京の三山、五頂、四香道です。

妙峰山の廟会が華北地域最大といわれた理由は、妙峰山廟会の香火がとりわけ盛んであったからです。その他の碧霞元君廟会——丫髻山や天泰山ですと丫髻山は文会が主体で、天泰山は三山の一つに数えられますが、名前は今でも知

られていません。ですが、妙峰山廟会は、かつて多くの花会が廟会に参加していました。今でも妙峰山廟会に参加したことがなければ本物の会とは呼べません。以前は妙峰山の廟会には非常に厳格な参加規定がありました。進香には進香の決まりがあり、家で会のご神体を駕籠に乗せ、香道を進み、山頂で進香して家に帰るという一連の行動は会則で厳格に決められています。それゆえ妙峰山廟会は国家級非物質文化遺産に登録されたのです。さきほども言った通り、この廟会は明末から400年続いています。しかし一時期中断された期間がありまして、民国から1952年まで活動を停止していました。民国時期に迷信打破の動きがあって、我々の廟会の花会は、焼香の「香」に由来しており、古くは香会と呼ばれました。その後しばらくすると郷村の郷で「郷」会となり、最終的には民間花会になったという変遷があります。現在でも民間花会と呼んでいます。そして、妙峰山廟会は民国から1952年までの中断に続き、その後さらに40年近く中断していましたが、1990年に正式に復興しました。花会の復興は師父の隋少甫の功績です。

『隋少甫氏の映像挿入』

(万里雲程 踏車老会 会首 隋少甫 1920-2005)

「王徳鳳」

妙峰山で隋少甫が「花会の泰斗」と呼ばれるのは、1988年ここの交通が不便だった時に彼だけが保存食と二鍋頭、それに北京で有名な醬牛肉をみずから携え潤溝村にやって来たからです。当時、私は潤溝村の村長でした。これが私達二人の出会いであり、縁です。彼が廟会復興の打診に来た時、村長の私に対応して、初めて酒を酌み交わし、復興について語りました。しかし政府は復興の申請を許可しませんでした。翌89年、再び隋氏が申請するも、まとも許可が下りません。そうした中、私は88年8月17日に妙峰山に行って、妙峰山の管理を手伝うなどしていました。その後、私たちはようやく合意を取り付けました。つまり役所ではなく私たち二人がやったのです。

そして1990年から廟会が再開され、5月1日に9の花会が妙峰山に上りました。91、92年は花会の参加が許されなかったので、カバンを抱えて、つまり化粧をせず、衣装をカバンに詰めて妙峰山に上り、娘娘殿で演舞をしたのです。昔は山頂で化粧して演舞することを「打軟包」と呼びました。山頂の娘娘殿前で化粧をして、それから演武を披露するのです。

90年からこの26年間、ああ、03年にSARSの流行で一年中断したので、実際は25年間、開催されています。これが花会復興の歴史です。

現在の復興された廟会は昔の廟会に則り、昔のままを再現した妙峰山廟会なのです。龍駕があり茶や水が提供され、敬虔な心で妙峰山に進香します。師匠

は私に、妙峰山に参拝するなら必ず規則を守れ、と言いつけました。妙峰山は奉獻を求めますが催促はせず、皆が敬虔であることを願います。それゆえ私はずっと師匠の教えを守り、今でも敬虔な心を持って妙峰山に進香し、龍駕を準備し茶や水を提供しています。

93年には第1回を冠した妙峰山廟会が地元政府に承認されました。93年に第1回廟会、翌94年に妙峰山郷政府主宰の第1回連絡会が開催されました。当時、私が言ったのは、“私は妙峰山にいる間、必ず師匠の言いつけを守っている”と。龍駕の準備、茶や水の提供などは当たり前のことです。用がある時だけ来て、無ければ来ない人を敬虔ではないとは言いません。参拝にはお金がかかるからです。妙峰山に行くのでも、交通手段やら飲食の準備やら、これらの運搬など、大きな負担です。こうした事は全て理解した上で、それでも古いしきたりを変えたくないのです。そして私は、妙峰山の廟会をもっと盛り上げたいのです。現状、毎年80檔前後の花会が廟会に参加しています。

これは文会・武会両方含めた数です。現状、文会は今9、10檔が復活していて、武会は基本的には十三檔会がすべて復活しました。しかし、毎年活動をしていても、毎回すべての花会が揃うとは限りません。それでも武会は毎年70檔くらい、文会は10檔くらい、毎年廟会には約80檔が参加しています。

「親朋同楽 清茶老会 会首 孫徳権」

当時、花会には厳格な規則・序列があり礼節もありました。花会は自力で山を登りますが、できない会は私たちに先導を依頼します。私が他の会の先導をしている時、私がおの会の代表なのです。山頂に着いたら娘娘殿に進香し、他の花会と挨拶し、行きは参拝のため、帰りは茶棚、つまり道中で饅頭や粥を提供する花会に挨拶しながら山を下ります。他の花会に挨拶するのは、自分達の花会が来たことを先に知らせるためです。それは、あとで私たちの会に茶や粥、饅頭を提供してほしい、ここを訪ねるので準備しておいてほしい、という意味です。花会が山頂に到着しても演舞を披露してはいけません。最初に娘娘様に参拝します。何を差し置いても娘娘様が一番なのです。参拝を終えたら帰り道でそれぞれの茶棚に挨拶しながら山を下るのです。

『清茶老会の焼香』

四月初三、金頂 靈感宮に御座します聖母様に敬虔な心で拝礼いたします。娘娘様のご福德は家に到り永遠に吉祥であれ。廟内外の皆様、娘娘様をお守りする皆様、執都、執旗、執棚の皆様、三山五頂 十郷八鎮、京城内外十里八郷の文武十三檔各会の世話役の方々、吉月吉日に北京市徳勝門外 文場会が金頂に進香いたします。焼香に参りました。敬虔であれ！

『廟会での花会のトラブル』

広安門外 豊台十八村 孟家村 万寿無疆 早船老会が文武各会の先輩方にご挨拶します。一拝、二拝、三拝。

世話役 1：家には家の決まりがあるように会には会の規則がある。本来はこういう状況は起こらない。あんたは衣装まで着て参拝に来たが、どの会が先導だ？

世話役 2：お前さん達は前引がないのか？

会 首 1：私が前引を務めています。

世話役 1：それは前引とは言わんよ。前引には師匠と弟子があるんだ。文角、あんたには師匠も弟子もいなくて、やり方を少し勘違いしているよ。

会 首 1：敬虔であれ 敬虔であれ

世話役 1：長い歴史のある老会、しかも万寿無疆会、それなら……

世話役 3：ちょっとお尋ねするが、あなたは何のために杏黄旗をお持ちで？

会 首 1：勉強不足で知りません。私達の会の規則は一部は勉強しましたが、他は全く知りません。

世話役 3：あなたの老会は…

会 首 1：何も勉強せずにここに来てしまいました。

世話役 1：よし、何も知らないなら帰るんだ！ 道を開けてくれ。あんたが連れて帰るんだ。でも演奏はしなさんな。

会 首 1：わかりました。演奏を止めるんだ。(道具を)片付けて、片付けて。

世話役 3：ところで、あなた達は十八村から来たのかな？

会 首 1：はい十八村です。

世話役 3：十八村には先導を頼める会はないのかい？

会 首 1：私達の会には…

世話役 3：ではあなた達は、まず先導を頼める花会を探しなさい。そしたら廟会にも参加できるでしょう。

『後日』

会首 2：われわれ早船小会は到らない点もありますが、どうぞご指導ください。世話役の皆様、敬虔であれ。

世話役：よし、お前さんは演舞用に着飾って、今日一日、会を率いたな。我々からお伺いするが、その杏黄旗は何のために？

会首 2：皆様にお答えします。かつて蜀江の地で姜子牙は封神榜を携え、手に杏黄旗を持ち文王に仕えていました。文王が江山に都を構え880年の太平を得たことに由来します。皆様、敬虔であれ！

世話役達：敬虔であれ！

会首2：未熟者ですがお許してください。私が早船会を代表して謝罪します。

さあ、もう一度ご挨拶を。

世話役：帰ってからも、しっかり指導してあげなさいよ。

会首2：さあ、さあ、さあ、(旗を)掲げて準備して！

『道士による神像開眼儀礼の準備』

「京劇役者（老生役） 譚孝曾」

妙峰山は明清時代の北京で戯曲の神を祀る唯一の廟宇でした。唐明皇・李隆基の御代、梨園の教坊は非常に盛んでした。高祖父の譚鑫培は当時、何度も妙峰山に参拝にきました。曾祖父の譚小培、祖父の譚富英、父の譚元寿、息子の譚正岩も頻繁にここに来て喜神様に参拝し、開祖様がここに祭祀されていることを常に感じております。妙峰山での参拝は譚家にとって精神的継承なのです。

「喜神殿での開眼儀礼」

『エンドロール』

撮影 パトリス・ファーバー

編集 史翠傑

芸術顧問 Andrea

主要人物

趙宝琪 王徳風

倪金堂 祈会敏

韓碩 張雪

郭春雷 王婷

孫徳権 劉鑫

郭春傑 盧仲鋒 景旺

梅友義 梅冬友

梅冬雲 梅冬福 陳根友

王淑銀 陳徳清

趙国利 譚孝曾

河北省涿州玉皇宮道士

学術顧問および文献提供

Kristofer Schipper 包世軒

劉湘晨 莊孔韶

陳巴黎 張超音

鞠熙 Marianne Elisa Bujard

Susan Naquin 張彦

隋少甫 王作揖

尹笛 錢君陶

孫四兒 孫太梓

謝辞

シドニー・ギャンブル基金会

妙峰山管理处

同心向善饅頭聖会

フランス極東学院北京センター

北京電視台 紀実中国

私にとって妙峰山とはあらゆる中国文化の「妙峰」であり、中華文明の偉大なる営みである。今ここにファーバー氏の映像によって全世界に向けて発信できることで、私の心は喜び、敬服、感激の気持ちに満たされている。妙峰山とその復興は本当に奇跡である。しかし中国全土の自然聖地、例えば終南山、王屋山、泰山、華山、ほかの多くの山々、もちろん妙峰山もこうした聖地の1つである。この聖地を再評価するために、我々はこの奇跡がさらに必要である。そこでの昔からの儀礼、舞踏、演舞、銘刻は過去から現在に到るまで絶えることなく続く。その一方で現代のオリンピックなどは、後に残るのはハゲ山のみで、多くの遺跡や史跡などは博物館など公的機関に取り込まれてしまった。鮮やかで活気のあった伝統はどこに行ってしまったのか。これが全てを物語っている。

Kristofer Schipper (クリストファー・シッパール)

文化部民族民間文芸発展中心 出品

2017年4月制作完成

中国節日影像誌

*訳者付記：翻訳を許された Patrice Fava 氏に感謝を表します。